**１）歴史・土地・気象**

**１．歴　　史**

「にのみや」の誕生から奈良・平安時代

　二宮町域には、今から1万数千年前には人が住んでいたという痕跡が発見された場所があります。

二宮町の周辺は地殻変動の激しいところで、土地が隆起を繰り返し、やがて３～４世紀になると、現在とほぼ同じ地形となり、集落の範囲も広がりました。

そして、６～７世紀になると、丘陵の斜面を利用した横穴墓が盛んに造られ、奈良・平安時代には、土器が多数出土するなど、いにしえの人々が生活していた様子が伺えます。

中世の「にのみや」鎌倉幕府との関わり

鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」には、「二宮河勾大明神(川勾神社)」で北条政子の安産祈願が行われたとの記載があります。

また、現在の「塩海橋」に名残がある「塩海」という地名では、鎌倉時代の御家人 二宮太郎朝忠がその地で地頭を務めていたことも記録に残っています。

近世の「にのみや」「の」のにぎわい

1600年代初頭、江戸幕府は街道の整備を進め、東海道の川勾神社の入口付近には、「江戸から十八里（約70キロ）」の一里塚が設けられました。

この周囲は、梅沢の「立場」と呼ばれ、旅籠屋(当時の旅館)や商店でにぎわい、大磯宿と小田原宿の間にある「間の宿」として、旅人の休息の場となり、栄えました。

明治・大正・昭和期の「にのみや」

　明治22年には、市町村制が施行され、一色、中里、二宮、山西、川匂の5か村が合併して吾妻村となりました。

　明治35年には東海道線二宮駅が開設、同39年には、秦野駅から吾妻村間の道路に軌道が敷かれ、馬車鉄道の運行が開始されるなど、交通網が整備されていきました。

　大正2年に動力が馬車から蒸気機関に替わり軽便鉄道となると、秦野からタバコ、落花生、木綿などが大量に運ばれ、二宮駅は中継地点として、活気を帯びました。

昭和10年には町制施行で「二宮町」となり、昭和30年代以降は東京や横浜に通勤可能なベッドタウンとして人口が増加しました。

「にのみや」の今

　現在は、より良い住環境の整備が続けられており、穏やかな気候、風土があいまって、住みよい湘南の住宅地として注目されています。